

飲んで過ごしました。もう精神力です。我慢です。忍の心です。慌てません。なるようにしかならぬ。悲観はしない。樂觀主義です。歌の文句ではないけれど、河の流れのように、明日のことは考えない、朝死んでいるかもしれない。生きていたらもうけもんだ。過ぎた苦労は忘れることだ。いつ死んでも悔いはない。余計なことは一切考えないことだ。むだなエネルギーを消耗しないこと。それで私たちは他の人たちよりやせなかつた。いつでも月例身体検査は一級であつた。強い丈夫な体を生んでくれた親に感謝しました。

先輩、星野廣高さん。信頼されるゆえん

ずばり欲のない人で象徴されましょう。どんなに苦しくても泣き言を言わない。いつでもでんと構えて動じない。分け隔てなくだれとも友達になる。決して自慢はしない。不正義に対しては断固妥協せず、戦っていく。まさに我々男だつたら、ほれるのも無理はない、すばらしい先輩です。先輩は武術に学術において、下士官教習所（関東軍）ナンバーワンの方で、関東軍司令官より賞詞を頂いた秀才であります。私は師団司令

部へ配属になってからは部屋も別でしたけど、バームでは枕を並べての戦友でした。シラミに食われたり、南京虫に食われたり、生死をともに誓つた仲でした。

私はすっかり南京虫にほられて苦しんでいるのに、先輩は全然平気なのです。虫は先輩をもったいなくて食わなかつたようです。これだけは不公平でした。前文にも書いたとおり、私が衣類を盗まれて裸になつたときも、衣服を脱いでこれを着れよと、死ぬときは一緒にだ、ともに生きるんだ。この一声は一生忘れ得ぬ感銘であります。先輩とはバームで二年くらいでお別れとなりました。先輩は三百人の長として幾多の苦難を経て帰還されたそうです。

私の虜囚小説

栃木県 岩崎 弘一

昭和十九年十一月末の朝鮮海峡は、牙をむき出しにして荒れ狂い、十メートルを超す波浪が北支派遣軍要

員の新兵を乗せた二隻の船を木の葉のように翻ろうし、空転するスクリュウの音が耳をつんざく。加えて米国の潜水艦が出没すること、船内はピーンと緊張している。しかし乗員の大部分は船酔いで倒れ、おびただしい嘔吐物が、船の激しい揺れに激流のように船内を流れ回る始末。

やっとの思いで釜山に上陸したときは、全員フラフラで、やっど宿舎にたどり着くありさまであった。しかし若さであろうか、翌朝はほぼ全員が回復して、臨時列車で北支に向かう。朝鮮半島を縦断し、当時の満州を通過して京漢線の保定に到着。そして、ほぼ三十キロ先の高陽県の独立歩兵第七八大隊に着いたのが、十二月二日と記憶している。

ここで三か月の教育訓練の後、李県に分遣駐屯していた第五中隊に配属され、ここを拠点にして、連日八路軍（現中国軍）との戦闘に参加した。追えば去り、去れば戻るというシーソーゲームのような闘いを繰り返すのであった。この間、痛切に思い知らされたのが治安の悪さであった。集団行動以外は駐屯地から一步

も出られず、まさに点を確保するのが精いっぱいだったのである。ここでの行動は二十年六月まで続いたあと、部隊の大半は旧満州に移動することになった。

当時の熱河省に入り、承德線沿線の銭家店に落ち着いた。ここでは対戦車攻撃を中心に訓練を重ねた後、旧満州に万里の長城を越えてくる八路軍（現中国軍）と戦うため承德線の終点、古北口に到着し、ここを拠点にして、万里の長城を越えたり戻ったりとの戦闘を続けていたところ、飛び込んだのが八月九日のソ連戦であった。

旧満支国境の山中にあった部隊は急きょ山中から出て、古北口と承德の間にある朝陽に引き返して、対ソ戦の準備に入ったのである。死を覚悟しての陣地構築作業が中止され、部隊全員集合のもとで、部隊長から読み上げられたのが、八月十五日の終戦の詔勅であった。放心状態になった我々は、熱河省の省都錦州に移動し、ここで武装解除の後錦州飛行場の格納庫に収容された。

そして十月、同飛行場を貨物列車に乗せられて出発。

混乱の極に達している旧満州国内の鉄道ダイヤを繕うようにして進み、ソ連兵監視のもと列車内で食事を取りながら、当時の奉天、ハルビンを通過し、旧満州国境の黒河に到着したのは、何と二か月後の十二月上旬であった。この間、日本に帰れるという信念は変わらず、対岸のブラゴエシチュenskからシベリア鉄道でウラジオストックに行くものと信じて疑わなかった。

吹雪の日が続き、凍てついた黒竜江をそりで渡って、荷物を三日がかりでブラゴエシチュensk駅に運んだのである。二段上下に仕切られた大型貨物車に、重なり合うようにして放りこまれる。貨物車なので、窓は小さく鉄格子がはまっているのみ。ひたすら走り続けて遅い夜明けとともに小さな駅に停車する。あにはからんや、駅に日本兵がいるではないか。近寄ってきた兵に、この列車はどの方向に向かって走っているのか尋ねると、何と西に向かっており、モスクワを目指しているのだろうと言われて、我々はがく然として言葉を失い、頭に鉄槌を振り落とされたようなショックと、深い絶望感に打ちひしがれてしまった。

列車は、容赦なく西に向かって走り続け、バイカル湖辺らしきところも一日がかりで抜けて幾ばくもなく、フルトイという小駅で降車命令が出る。外は炭坑地帯らしくボタ山がそこそこにあつて、我々は炭坑に入つて死ぬまで酷使されることを感じ、ますます絶望は加速されていった。厚い防寒用衣服に包まれているものの、外気はすさまじい地吹雪となつて、骨まで凍りそうな厳しい風が体を吹き抜ける中、歯を食いしばつて収容所まで荷物運びである。

木造のバラック仕様の建物は、内部が蚕棚のように上下二段となつており、一段が柱を境にして二人ずつ四人、上下で八人の収容であつた。ここで幾日か過ぎてようやくあきらめの心境に入つたころ、身体検査が外観による骨格、肉づきの基準で、一級、二級、三級と四級に分けられ、四級は病人もしくは病弱者で非作業員であり、極端にやせていた私は三級に区分された。三級は、収容所内の作業や外の軽作業に従事し、私は主として収容所外の食糧倉庫から炊事場まで、冬はそり、夏は大八車で、毎日毎日糧秣を運搬するのが仕事

であった。二、三キロぐらいの往復であったが、重い荷物、そして寒気には、やせ細った私にとって苦痛そのものの連続であった。

そんな作業を一年近く続けているうちに、炊事要員に欠員ができて炊事班に入ることになった。しかし与えられた仕事は、釜番と称して、給食をつくる大きな釜三個などに、まきや石炭で火をたくものである。昼夜の交替勤務を二人でこなし、石炭運びやまき割りなど重労働の連続であったが、炊事ということで一般より食物に恵まれたことが、きゃしゃな私でも何とかしのげたのであった。

この収容所は一年余りで離れて、クズネッツ炭田の中心地ケメロボ市の街中に収容される。プレスといわれた収容所である。ここに來て私は炊事班から作業班に変わり、主に野外の雑役や土木建築作業に従事する。作業班は幾つかに分かれ、工場内の重労働に従事する者や、作付期・収穫期の農作業に行く班もあった。

食糧事情は、入所当時は極めて悪く、我々が旧満州から運びこんだコウリヤンやアワのスープ、それにエ

ン麦の黒パン一片で、食べがりの我々は一日中飢餓状態にいたのであるが、その後、ニシンやサケなどの魚類や羊肉なども支給されるようになり、改善されたものの満足にはほど遠かった。そのため、作業に出ると野草（アカザ、ハコベ、山ゴボウなど）やキノコ類を採取してきてゆでて食するなどして、食べ過ぎからの中毒症状や、中にはキノコにあたって死者が出るほどのものであった。

炊事班から離れて半年後、また欠員が生じて戻ることになった私は、また同じ釜番を主にやらされたが、今度は、ソ連側の極端な内部作業（管理部門）の人員削減により長時間勤務を強いられるようになり、二十四時間勤務して十二時間休養ということも日常のようであった。

病弱者や病人は、昭和二十一年に帰国したものの、その後帰国の情報は途絶えてしまい、あきらめとともに窮乏生活に始まり始めた二十三年夏ごろ、本格的な帰国のニュースが飛び込んでくるに収容所内が活気づいてきた。しかし、炊事班は後送りになるとい

う話があつて私は半ばあきらめていたが、その後正式な発表で、帰国は全員となつて、思わず飛び上がったのである。

帰路は、ケメロボからシベリア本線に入つてナホトカに行くもので、往路と同じ大型貨物車利用であるが、八月ということもあり、また一段当たりの収容人員も少なくてゆつたりとした旅となつた。しかし我々炊事班は、十八トンという小貨物車に釜が二基築かれ、これに乗つて三度の食事をつくりながらの帰路となつた。長時間停車駅では、ビアだるを担いでの水汲み、まき割りと休む間もなく働き、食事間のわずかな時を休息するという過酷な労働を五日ほどやりながら、八月十日にやっとナホトカ着となつた。

ここで最後の労働として、炊事の釜壊しがあつて、すすで真つ黒になつて第一収容所に入つたのである。

第一及び第二収容所は港湾労働に狩り出されたが、第三収容所に入つて、やっと帰国船を待つばかりとなつて落ち着くことができた。八月十五日に第一大拓丸が到着し、岸壁で姓名を読み上げられてタラップを上が

り、甲板に足を着いた途端全身に感激が走り、涙がとまらなかつた。

第一大拓丸は、油なぎの日本海をゆつくりと故国に向かい、途中、親ソ行動の際立つたオルガナイザーへの暴行事件があつたりしたもの、八月十八日、舞鶴港に到着、夢にまで見た故国の土を踏むことができたのであつた。

シベリア挽歌

岩手県 及川 新 蔵

とにかく暗いし窮屈で身動きができない。有蓋貨車につくつた二段ベツトは、起きれば頭がつかえるし寝れば横になつたままみたいなきゆうぎゆう詰めで、何ともやりきれない。が、しばらくの辛抱で懐かしの故郷へ帰れるのだからと言ひ聞かせながら、皆比較的明るい表情で振る舞つていた。何日か後に奈落に突き落とされることも知らずに。